

横浜市立南中学校 学校評価報告書（令和2年度）

重点取組分野	令和 2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①一人ひとりの生徒の基礎的・基本的な学力を定着させるために、指導方法の工夫や個に応じた指導及び家庭学習の習慣付けなどを行う。②生徒が自らの考えを発表したり、相手の考えを聞いたりして、より主体的に学習に取り組めるように、「主体的・対話的で深い学び」の考え方を取り入れた授業展開を研究していく。	・基礎的・基本的な学力を定着させるため、指導方法の工夫を行っている。引き続き、工夫して取り組んで行く必要がある。定期テスト前には、希望する生徒に学習相談を行い、学力向上を行っている。 ・研究授業等を通して、「ICT活用」や「主体的な深い学び」等を視点とした授業改善が進み、生徒が主体的に取り組むようになってきている。	B
豊かな心	①行事を通して生徒一人ひとりが成長を感じられる指導や評価を大切にしている。 ②人とかかわりをもつことで自分の存在を肯定的にとらえ、楽しさを感じ、自らの働きかけで人の役に立った、人に喜んでもらえたなど相手の存在によって得られる「自己有用感」がもてる指導に努める。	今年度は行事や部活動が出来なかったため、例年のような達成感や充実感を味わう機会が少なかった。次年度はこのような状況が続いても、日常の活動で達成感や充実感を味わえるような機会の創出が必要だと感じた。こういう時期だからこそ、生徒一人ひとりの「自己有用感」を育成していくことが大切だと認識した。	C
健やかな体	①体力向上に向け、一校一実践運動を通して、生徒一人ひとりが課題を確認して運動に取り組む態度を育てる。②基本的生活習慣の定着と健康・安全についての理解を深めるために健康教育の充実を図る。	①感染拡大の状況を受け、試行錯誤をして場の工夫を行いながら運動不足の生徒たちに対応した。健康の大切さを伝え、手洗いの励行などの声かけを行った。②感染症予防のために、マスクや手洗いの励行をし、映像で分かりやすく説明した。健康観察票を毎日提出する習慣をつけ、自身の体調を管理できるようにした。	B
児童生徒理解	①教育相談を各学期に実施し、年間を通して生徒の状況の把握に努める。また、教職員からの声かけや生徒から話しやすい体制を整え、日頃から生徒一人ひとりに寄り添った生徒指導に組織的に取り組む。 ②生徒指導部を複数回実施し、一人ひとりの生徒について情報を共有し組織的な対応を行う。	各学期に実施した教育相談により、生徒の状況の把握に努めた。特に今年度は休校による生徒の心境の細やかな変化に配慮し、学校全体で一人ひとりの生徒に関わる意識をもつことができた。生徒指導部を中心に、生徒の情報共有をこまめに実施すると共に、新たな生活様式に対応した柔軟なルールの提案(服装・登下校など)なども行うことができた。	B
地域連携	①地域行事や地域防災への参加、ボランティア活動、職場体験、福祉施設との交流を通じて、地域と相互に関わり合う中で、生徒の健全育成を目指す。②地域連携について、生徒会や委員会、部活動がより効果的な取り組みができるように検討、実践する。	今年度は、感染症予防の観点から地域行事やボランティア活動の多くが中止または延期となり、実施が困難であった。次年度に向け学校・地域の双方が安心して取り組める方策を考えていきたい。	B
キャリア教育	①身近な人たちとの関わりを通して自己を見つめ、自分の生き方を考える。②職業調べ、職業講話、職場体験を通して自身の適性を知り、自己理解を深める。さらに自己理解を深め、自分自身の適性を生かせる具体的な進路に結び付ける。	①家族や友達、先生方との関りを通して自己を見つめ、自分の生き方を考えることができた。②職業調べや学校調べ、地域の商店街とのつながりを通して、仕事の意義や自身の適性を知り、自己理解を深め、自分自身の適性を生かせる生き方について考えることができた。	B
いじめへの対応	①道徳科の授業や日頃の生徒との関わりの中でいじめを許さないという考えを一人ひとりに定着させる。生徒指導部と連携した教育相談や生活アンケートにより細かな変化を見逃さない体制をつくる。また、教職員対象のいじめ防止研修を行い、全教職員がいじめに対する態度を高くする。②いじめ防止対策委員会を開催し、認知された案件の経過確認をていねいに行うことで再発防止に努める。	道徳科の授業を通して、いじめを許さないという考えを生徒に少しずつではあるが定着させることができた。また、生徒指導部との連携で年間3回の教育相談を行うことにより多くの生徒に寄り添う指導に努めた。いじめ防止対策委員会では、定期的に会議を行い現状と今後の対策について話し合うことができた。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①校内授業研修やメンターチームなどの研修会の充実を図る。キャリアステージに応じた各種研修会の情報を発信し、積極的に活用することで指導力や資質の向上を目指す。 ②校内組織の活性化や効率化、職員の負担軽減を目指し、主幹教諭、主任、各分掌の長やミドルリーダーの指導力を有効活用するため、主幹・学年主任会等でより良い学校運営に向けて検討していく。	・校内での研究授業を教科を中心に2回実施した。1回目は、5年次以下の教員を対象として行い、指導主事に参加していただき授業力向上への貴重な意見を聞いた。2回目は全職員が互いに授業を見合うことで、気づきや発見を今後生かせる会となった。今年度は感染症の影響で授業形態の工夫を行う必要があり、授業の在り方について改めて各教科で見直すことができた。 ・メンター研修では職員の課題共有の場となった反面、計画的に研修を行い、ミドルリーダーの育成、指導力を上げていく必要性を感じた。 ・感染拡大防止に向けて多くの取組がなされているからこそ、職員の負担が軽減できるように、主幹・学年主任会を中心に検討をしていく必要性を感じた。	B
ブロック内評価後の気付き	・今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で直接の交流会がもてなかったためメールなどのツールを利用した情報交換を行った。「9年間で育てる子ども像」を踏まえ、各校の想いを共有する中で小中9年間でどのような力を伸ばしたいかを各校で再認識した。 ・ブロックで掲げた児童・生徒育成のためのキーワードについて、現状を把握し、指導に生かせるように、職員全体で情報共有の時間をとり、よりよい形で児童・生徒に還元できるようにしていきたい。		
学校関係者評価	例年学校関係者評価については「まちとともに歩む懇話会」でご意見をいただきまとめさせていただいております。今年度はコロナ感染症拡大防止の観点から、学校の取組を紙面にてお知らせしましたが、懇話会も開催できず、ご意見を伺えておりません。今後も引き続き学校、家庭、地域との連携を深め子どもたちの健全育成に係っていきたく思います。		

中期取組目標振り返り

8つの重点取組分野の具体的な実現に向けて、昨年度までの成果や課題を職員全体で共有しながら、学校教育目標を常に意識した取組を始めた。来年度から始まる新教育課程に向けて、管理職、主幹・学年主任が中心となり、生徒・保護者・地域の方が身近に感じ、分かりやすい学校教育目標を設定した。新型コロナウイルス感染症が学校生活に大きな影響を与えている今だからこそ、改めて生徒同士が互いに認め合い、助け合うことができるように、様々な事象、場面を「自分事」として捉えることができるような指導、声かけに努めた。学習指導においては各教科担当が指導の工夫を行い、基礎・基本の定着を目指したわかりやすい授業実践を行い、次年度から始まる新教育課程に向けての準備を行った。